

山桃忌短歌祭によせて

(思いつくままに記しました)

文化協会 井 奥 輝 明



“おまはん”ここにおったのか!!

昭和六十一年の八月初旬のことで

す。第一回山桃忌の打ち上げ(財)

関西中小企業総合センターに於いて行われたことを記憶しております。当時県から出向して、当センターに勤務しておりました私は文学園の主幸木村真康師と久しぶりの再会でした。センターの和室四十畳の部屋には木村真康師、木村満二師、松田道別師、岸原弘明師、矢谷水青師、また女性には川口汐子先生、岩朝加都良氏、北浄代氏、大野八重子氏等の方々と記憶しており町関係者のご出席の方々が記憶にあります。

第一回目 一位入賞者夢前町大西豊子さんの短歌はつぎのとおりです。

工事場の宿舍の前に車より

レンタルの赤き夜具降ろしおり

小生は中学・高校在学中に詩歌をホンの少し嗜んでおりましたが卒業後は疎遠のまま過ごしていたある日大善寺の住職棟広照文氏つまり「西賢治」と再会後誘われて文学園の誌友となり刊行誌を購読するようになりました。棟広氏は同窓の一年先輩で同じ柔道部に在籍し昵懇の交友関係にありました。

福崎短歌会は文学園所属で福崎在住の人たちが中心になり発足したのと思われまます。以後主催者が福崎町文化協会内福崎短歌会が主催となり二十年数年の歴史をかさねる行事となりました。

現在辻川山の短歌の森には第一回・昭和六十一年から第二十四回平成二十一年までの入賞第一席の短歌短冊が役場職員の労力により短歌の森に掲示されております。

第一回目から第四回目までは町長賞の受賞短歌であり五回目から二十四回目(平成二十一年)まで井上通泰賞が受賞短歌として掲示されております。もともと山桃忌奉賛短歌祭は民俗学の創始者柳田國男先生の功

績を称えて設立されたものと思いがすが・・・?

柳田國男先生のご兄弟には著名な方が多く、兄の井上通泰氏が国文学者であり歌人でも著名な方であったので短歌祭の最優秀作品の短歌には町長賞から通泰賞にかえられたものと思えます。

また山桃忌短歌祭と並行して毎年写生大会が行われております。幼稚園・小学・中学生が対象者ですが、入賞第一席は映丘賞に一昨年から変わりました。

松岡映丘氏は、柳田國男先生の実弟であり日本画壇の重鎮の人物です。山桃忌短歌祭については前述しましたが、小生が棟広氏のお誘いにより文学園福崎短歌会に入会(平成十二年頃)と同時期頃に文化協会の入会を県職OBの小林氏から紹介されて入会したような記憶があります。

平成十三年・山桃忌奉賛短歌祭に参加しましたところ松岡実氏より次回から司会をやるように引導をわたされ第十七回目から不肖私めが奉賛短歌祭の司会を努めさせていただいております。山桃忌奉賛短歌祭としては毎年二百首以上の応募がありロ一カルの短歌祭としてはそれなりの功績を上げているものと思われまます。

新しく生まれる結社、また解散消失の会・結社等々ありますが、福崎町短歌会は皆様のご支援ご協力をいただき今日まで継続出来ることを心から感謝申し上げます。

第一回目から二十三回目までの選者ほ川口汐子先生にお願いしておりましたが、川口先生のご高齢と体調が芳しくなく選者を退かれ後任には川口先生ご推薦により昨年度(第二十四回目)より楠田立身先生に選者をお願いしております。楠田立身先生は県歌人倶楽部の代表であり短歌「象の会」の主宰者です。また日本ペンクラブ会員でご夫婦揃って兵庫県歌人倶楽部の幹事を努めておられます。

第一回目から二十四回目までの山桃忌奉賛短歌祭の通泰賞受賞者は、小生の知る限りにおいて棟広照文氏を含めて三名の方が鬼籍に入られております。

全国的には俳句愛好者が多いようですが結社の数や催事・行事等については短歌の方が多いように思えます。手前味噌でしょうか・・・? 今年には官中歌会始めの入選者にはご高齢の方が多くお若い方が見当たらないようです。福崎町の短歌会も高齢化がすすみ会員の歌会への

参加が少なく呻吟しております。皆様の中に短歌に興味を持っておられる人はご入会ご参加をお持ちしております。

四年前より“ふるさと文化祭”に新しい試みとして、書と生け花と短歌の朗詠を同時進行で行います。コーポレーションを企画しております。

第二十四回 平成二十一年

通泰賞受賞歌

あまたたび米磨ぎしかな日本の
をみなに生れて厨事して

短歌 水野美子先生 書 藤本照子先生 朗詠 埴岡國利先生により
第二十三回 平成二十二年一月 “ふるさと文化祭” に於いてお披露目しました。

次に小生のことで恐縮ですが少し述べさせていただきます。

“ふるさと文化祭” に於いてエンディングテーマ曲として “落葉” を取り上げて戴いており大変嬉しくまた心より感謝しております。

“落葉” 作詞 井奥輝明

作曲 松岡利久

二人は小学・中学・高校・竹馬の友として、別々の世界を歩いてきました。少し想い出しながら松岡利久君についてご紹介させていただきます。

松岡君は神戸大を卒業後、東京芸大の長谷川善雄師の作曲専攻に師事し卒業後は“美空ひばり”のバンドピアニストとして又ビッグサウンドのコンサートマスター等を努める傍ら作曲・編曲家に転向し、演歌の大御所として著名人となる。ヒット曲を少し・・・

鶴岡正義と東京ロマンチカの「小樽の人よ」は彼の影のデビュー曲と
思う。

瀬川瑛子の「命くれない」はミリオンセラーを記録、他に坂本冬美・香西かおりの曲も手掛けカラオケの好きな人は曲を聴いただけで松岡君の手掛けた曲だと判るそうなの？

還暦を迎えてより本名を名乗り、叙情歌・叙景歌・シャンソンとジャンルを広げ、近頃は“金子みすず”の詩に曲をつけ各地でコンサートを実施しているようです。

つぎにこれも私事で誠に恐縮なんです。柳田國男に興味を持ち以前に柳田國男ゆかりの地サミット会議なるものが全国数カ所で行われておりました。その催しに参加して思いついた時に作りました詩に彼が曲をつけてくれた題名を少し列挙いたします。

(題名)

宮古島旅情 沖縄県宮古島
(題名) ひえつき恋唄 宮崎県椎葉村

(題名) 伊良湖岬旅情 愛知県渥美町
(題名) 遠野物語 岩手県遠野市

東京都世田谷区(サミット参加)
民俗学者の父と呼ばれる人 柳田國男の足跡をたどり、感動・夢・心・人・考え・思い・学ぶこと頼り、いろいろと詩を作りたいと夢を遠く馳せております。

また文化の魅力を紡ぎ出す地元(福崎町)の人達の努力意気込みが素晴らしい、辻川の夏まつりは辻川山・鈴ヶ森神社・柳田國男松岡家顕彰会記念館、歴史民俗資料館、大庄屋三木家周辺のクリーン作戦により辻川界隈の夏祭りを盛り上げております。

作家玉岡かおるの“銀の道一条”

が刊行されてより生野街道が銀の馬車道として新しく伝承文化が発掘されクローズアップされました、JR播但線・神姫バスに華々しく広告宣伝が行き交う毎日です。地元小学校、中学校の生徒とその保護者を中心とした劇団が創成され松竹新喜劇の渋谷天外さんの書き下ろし銀の馬車道が公演され大変な人気を呼んでおり

ます。銀の馬車道劇団の演じる明治初期時代の生活環境や人情を垣間見ることができ当時の文化を彷彿と感じます。(平成二十一年十一月にも福崎町文化センターにて上演)

柳田國男先生も黄泉の国でさぞかしお満悦されている事と想像いたします。

をさな名を人に呼ばれしふる里は
昔にかへるこちこそすれ

山桃忌短歌祭に拘ることを思いつくままに記述してみました。加齢とともに耳はとおくなり日常生活は時の流れに沿えず、携帯・パソコンは殆ど手の届かない渦中にあり文章のなかに思い込みや記憶違いも多々あると思われませんがご勘案の上ご容赦願います。

ご判読ありがとうございます。

追伸

松岡君の極最近の活動情報ですが昨年十二月二十日に東京で“シャンソンの夕べ”とかを催し、遠野物語・伊良湖岬旅情・シャンソンの晩秋(この曲は神戸の街中の情景歌です)等をまじえたコンサートを開催されているようです。